

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） ホルカ・イリナ

学位申請者 熊澤真沙歩

論文名 「川端康成の舞踊小説研究——モダンダンスの振付師的想像力」

【審査結果】

審査の結果、審査委員会は、全員一致で同氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。

なお、事前審査は2025年11月17日にオンラインで実施され、最終試験は、2026年2月13日にハイブリッド形式で14時から約3時間かけて、アゴラグローバル3階プロジェクトスペースにおいて実施された。審査委員会は、加藤雄二（本学）、西岡あかね（本学）、友常勉（本学、主任指導教員）、柴田勝二（本学名誉教授）、ホルカ・イリナ（本学、主査）の5名から構成された。

【論文の概要】

本研究「川端康成の舞踊小説研究——モダンダンスの振付師的想像力」は、1920年代から30年代にかけての「日本モダンダンス」流行に俊敏に反応し、舞踊ジャンルの横断性や新興メディアの流通性に光を当て、「モダンダンス」と積極的に関わった川端康成の商業的な戦略、時代状況や社会制度と結びつく舞踊身体認識の変化を、小説内と同時代舞踊や文化のコンテクストと結びつけて検討したものである。5章に渡って構成された本研究では、舞台公演に留まらず、劇場やコンサートホールなど舞台設備の近代化、舞踊を取り上げた雑誌、映画、新聞を含めたメディアとの協働性によって成立する川端の舞踊小説が日本における「モダンダンス」の発展期を〈記録〉しただけではなく、むしろ川端文学そのものが舞踊と近接して形成されたことを明らかにするものである。

【論文の構成】

論文の構成は以下の通りである。

序章 「舞踊」のモダニズムを虚構化する——川端康成の舞踊小説研究序論

第一節 川端の「舞踊」体験と虚構化の手続き——本研究の背景

第二節 川端の舞踊小説研究概要と本研究の位置づけ

第三節 「モダンダンス」と「日本モダンダンス」の定義・範囲

第四節 川端のモダニズム研究における「身体」の位置づけ

第五節 本研究の構成

第一章 演じる「性」の変容——長編「浅草紅団」の曲芸／浅草オペラ／浅草レビュー

はじめに

第一節 女性演芸従事者の「哀史」——初期習作から長編「浅草紅団」へ

第二節 「浅草オペラ」から「浅草レビュー」へ——「性」の切り分け

第三節 「浅草レビュー」から「モダンダンス」への移行

おわりに——「日本モダンダンス」培養地としての浅草

第二章 「架空的生命」の創出——短編「禽獣」における〈光〉の没入感

はじめに

第一節 新しい音楽・舞踊の場としての「日比谷公会堂」

第二節 舞踊文化受容と鑑賞者・批評家としての「彼」

第三節 生物と舞踊のシンフォニー——「架空的生命」を創出する〈光〉の没入感

おわりに——〈合掌〉への読者の振付師的想像力

第三章 舞踊家の〈装い〉——「舞姫の暦」におけるデパート文化と「日本モダンダンス」

はじめに

第一節 地下鉄とデパート——都市空間の立体交差性と新中間層

第二節 ふたりの「弓子」——変装する浅草／粉飾する銀座

第三節 「鶴見千花子」の〈装い〉——モダンガールの身体条件

第四節 小説で創作された舞踊「神秘の炎」——「東洋風」なモダンダンス

おわりに——「憧れ」の対象としての舞踊家

第四章 「びつこの踊」の舞台未満性——「花のワルツ」における振付師的な想像力

はじめに

第一節 「鈴子」と「星枝」のデュエットの——舞踊の観客から映画の観客へ

第二節 「星枝」のソロ——野外の即興舞踊、衣服の解放性

第三節 「びつこの踊」——舞台未満の身体表現の可能性

おわりに——規範から逸脱する「踊り」の発見

第五章 創作舞踊「仏の手」の再演不可能性——「舞姫」における舞踊劇『長崎の絵踏』と『プロメテの火』

はじめに

第一節 『長崎の絵踏』——「波子」の煩悶と解放

第二節 『プロメテの火』観劇後——決意する母娘

第三節 創作舞踊「仏の手」の再演不可能性

おわりに——創作舞踊「仏の手」の再演を拒む「波子」の抵抗

終章 舞踊史記録ドキュメントと振付師的シミュレーション——川端の舞踊小説研究総論

第一節 モダンダンスを虚構化した川端の舞踊小説の反芻体験可能性

第二節 舞踊の芸術化過程——女性舞踊家をめぐるジェンダーの変容

第三節 コレオグラファー的な想像力——知覚経験・舞踊経験を動員する読書行為

第四節 「モダンダンス的日本舞踊」と現代の舞踊小説への応用——課題と展望

【各章初出一覧】

【参考文献一覧】

文学研究

舞踊・音楽・演劇研究

その他

【付録】川端康成と「舞踊」関係年表

【審査の概要及び評価】

川端康成の舞踊を扱った作品を文化史的な視点から論じた本研究では、モダンダンスを中心とする舞踊に主人公ないし中心人物が関わる設定の作品群である、『浅草紅団』『禽獣』『舞姫の暦』『花のワルツ』『舞姫』が取り上げられる。川端文学を論じる際は『伊豆の踊子』『雪国』『山の音』といった代表作を中心に論及するのが通例だが、本論文ではそうした作品を扱う代わりに、表題にあるように「舞踊小説」としてカテゴライズされる作品に焦点をあてることで、主に舞踊やダンスに携わる女性登場人物が担っている身体表現において、同時代に存在した現実の舞踊や舞踊家の表現を反映していることが資料を博捜することで明らかにされている。

例えば『浅草紅団』が当時の浅草レビューを映していることは自明だが、筆者はさらにその浅草レビューがモダンダンスの母胎となった経緯を浮き彫りにしている。『禽獣』の千花子についても、彼女が舞踊を見せる日比谷公会堂で当時「閨秀舞踊競演会」が開催されていた事実との照合から、高田せい子のような実在の舞踊家との重なりが割り出されている。また『花のワルツ』における星枝と鈴子に見られるバレエとモダンダンスの混在は、1930年代の舞踊界に現実にあった両者の混在を映し出していたことが明らかにされる。

これによって本論文は、その多彩な資料調査にもとづいて、川端の「踊り子」像の中に歴史的なダンサーの姿を跡付けることに成功している。まずそれが高く評価される。すなわち、川端文学を同時代のモダンな都市文化や芸能史、舞踊史の文脈に位置づけたということが、本論文の大きな成果である。こうした実証的な考察は、文学研究におけるカルチュラル・スタディーズの貢献といえよう。すなわち、独自の感性と美意識のなかで作品を生み出していったと見られがちな川端文学に、舞踊をリソースにした多層性が内在していたことを明らかにした点で、斬新である。また、事前審査では、川端文学への批判が弱いのではないかと指摘されたが、最終稿ではこの点に関してはおおむね解消され、作者の発言と文学テキスト内の登場人物による言動が意識的に区別されている。小説に表されている人物の思想と作者の思想が引き離されて論じられることで、川端の小説の文学的価値をより鮮明にすることに成功している。

ただし、その反面、川端の作品が文化史的研究の素材の域にとどめられており、文学表現としての自律性への探求が後景化しているという印象を拭えない面がある。川端が若年期から仏教に親しみ、法華経を座右の書としていたことはよく知られるが、そうした要素

もこれらの作品に含まれ、主題の表出に寄与している。第二章で舞踊と合わせて論じられている『禽獣』における「光」もその一つで、ここでは心中の誘いを受け入れた千花子が取る「合掌」の姿を「真夏の白日の眩しさ」が包んでいたことが、「彼」に「生命」への志向を蘇生させたこととされる。けれどもこの作品には冒頭の禅寺での「津送執行」に始まる濃密な仏教的文脈が流れており、千花子の「合掌」の姿もその一環をなしている。それは単に〈光—生命〉という連想だけでは解消されないものが込められているはずだが、そうした面に対する考察はなされていない。あるいは第四章で扱われている『舞姫』に出てくる「仏界入り易く、魔界入り難し」は川端文学を特徴付けるものとしても挙げられるが、論文では言及されていない。作品の前半部分では仏像の話題も出てくるだけに、仏教的な文脈は看過しえないだろう。

また女性が舞踊の主体として象られること全般の意味がより積極的に論の前提として考察されてもよかっただろう。川端文学では『伊豆の踊子』の旅芸人、『雪国』の芸者など広く芸能に関わる者が多く現れ、舞踊・ダンスをこなす女性たちもその一角をなしている。範疇としては芸能者の方が広いために、同時代的な文脈に加えて古代からの歴史的・宗教的文脈のなかに舞踊を位置づける必要があると思われる。川端の初期作品の魅力は新感覚派的なモダニズムと、歴史の古層と連繋する宗教的・民俗的文脈が融合しているところにあるといえ、後者の側面が論文でほとんど触れられていないのは惜しいと思われる。

さらに、「振付師的想像力」という概念の定義についても十分な定義を満たしているとはいえないように見受けられる。登場人物の動きのオペレーションや演出は、一般的にはすべての小説の「語り手」が行っていることである。川端の「振付師的想像力」には、単に作中のダンスや舞踊の動きを描いているだけではない、川端文学を規定している本質的なモダン性がそこにあるといえるだろう。

この問いにかかわって、川端の舞踊小説を、小説のモダニズムと舞踊のモダニズムが出会う場と捉えるのであれば、その前提として、川端の文学的モダニズム（新感覚主義）のとらえ方を検討すべきだったのではないかと考える。

フィクション論についても、消化しきれていないように見受けられる。また、異なる発表媒体とジャンルにかかわって、新聞連載小説（『東京朝日新聞』『福岡日日新聞』）や、短編小説、映画シナリオの脚本として企画され、短編小説となった（『改造』）ことなど、これらジャンルとしての特徴がどのように身体の表象、あるいは「振付師想像力」を起動しているか、もっと掘り下げるべきだっただろう。

総じて、川端の舞踊小説を年代順に追い、作中に登場するダンスや踊り手の記述から同時代のダンス文化とのリンクをたどり、川端文学の中で「振付師的想像力」が発展するプロセスを明らかにするという論の骨子が辿られているとはいえ、作品分析・文体分析を通じて、この発展プロセスを十分に浮かび上がらせることに成功しているとはいえない。その理由として、作中で描かれる架空の舞踊の身振りが、テキストの構造や文体にどのように反映されているのかが十分に分析されていない点が挙げられよう。また、語り手(=振付

師)と踊り手という図式に注目するのはよいが、あまりにもその図式にこだわりすぎたため、その図式からはみ出すアスペクトが考慮されなかったことも理由として考えられる。

また、個別の舞踊史とのリンクに注目するあまり、川端の「踊り子」像にしばしばみられる既存の、ほとんど紋切型といってよいようなモチーフやトpos（例えばファム・ファタル的イメージや処女性の強調など）への目配りが十分ではない。

また、川端の「踊り子」イメージを一面的にミソジニーと捉えない点は評価できるのだが、それ自体が男性中心的な思考構造と無縁ではないモダニズムの文脈で、これを、川端の生命主義などと結び付けつつ、全面的にポジティブな評価をするのも批判性に欠けているといえるだろう。川端の女性像やダンス観のジェンダー的な複雑性についての掘り下げも必要であっただろう。

『花のワルツ』に登場する「びっこの踊り」の分析に際しても、踊り手である南條の身振りの分析にかかわって、1920年代のテキストの中で称揚されていた「きたない美しさ」への注目と、『花のワルツ』に登場する負の身体性を帯びた舞踊には何らかの連続性があるのかも論じて欲しかった点である。この点を深掘すれば、1930年代に川端がモダンダンスへの関心を強め、舞踊小説を自身の仕事の中心に据えるに至った背景にどのような美学的な問題があったのかを、もっと説得力をもって論じることが出来たように思う。

これらの課題は、本研究が川端文学に見られるモダンダンスを中心とする同時代の舞踊との連関を探求することに主眼に置かれていることを鑑みれば、ないものねだり的な要求も含まれている。ただし、資料を博搜した労作であるだけに、上記のような文脈にまで眼を配ればさらにレベルの高い博論となったと思われる。とはいえ、手堅い実証的な探求と考察が積み上げられた本研究は、十分博士号に値するものであると判断される。

以上、いくつかの課題は残しているものの、その独創的な挑戦、先行研究を乗り越える調査と成果、そして学術論文としての完成度をふまえて、熊澤真沙歩氏の博士（文学）の学位授与は妥当であると審査員全員は一致して認めるものである。